環境保全と地域づくりの両立を目指した認証制度に関する考察
ー羽幌町のシーバードフレンドリー認証制度についてー

北海道大学大学院環境科学院
環境起学専攻　実践環境科学コース
村瀬　芽依

環境保全や地域活性などに関する認証制度が数多く存在する。例えば、佐渡市の「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」や豊岡市「コウノトリの舞」認証制度などが、環境保全の認証制度として有名であり、同様に地域活性に関する認証制度が数多く存在する。持続可能な開発にとって社会・環境・経済の要素がいずれも不可欠であり(国連，2015)、認証制度においても、両方の視点をもつことが望ましい。

本研究は、環境保全と地域活性の両立を狙っている北海道羽幌町のシーバードフレンドリー認証(SBF認証)は、どのような過程を経て始まったのか？その認証の現状における課題は何か？を明らかにすることを目的とする。岩田(2016)では、上記の2つの認証において、認証の成立過程について議論しており、SBF認証でもその点に特に注目する。羽幌町は、貴重な海鳥が数多く棲息する天売島・焼尻島がある約6800人の町である。本研究では、関連する文献調査、協議会への参与観察(4回オブザーバー出席)、関係者の聞き取り調査(中心的役割を果たす人々から周辺的な人々まで13人)を実施した。

SBF認証の成立過程は、SBFの対象が拡大していく3つのフェーズ(I，II，III)があった。(I)2006年3月の羽幌町環境基本計画では、「シーバードフレンドリーマーク」として、海鳥の混獲防止の網などの製品について認証するものであった。しばらくして、(II)2015年1月～3月に環境省のヒアリング業務が行われ、その報告書では、今後の方向性として、海鳥だけでなく、(基本計画にもあった)ビオトープなども含む羽幌町の環境保全全般に対する「シーバードフレンドリー(仮称)の認証制度」と記述されている。(III)2016年11月～2017年12月、いきいき海鳥の会(全7回)では、環境保全と地域活性に対する認証制度の大枠がつくられ、2018年1月にSBF推進協議会が発足した。

同様に、(I)羽幌町環境基本計画を作成する際に、記名式アンケートを行い、(II)聞き取り対象も、環境保全関係者だけでなく、地域産業の担い手にも拡げ、(III)いきいき海鳥の会では、参加者は、最初4回でCSRやSDGsを通して環境と企業の関係性や位置づけなどを学び、羽幌町の現状をSDGsに当てはめるテーブル議論などを行い、最後の2回で認証制度の大枠について議論した、といったことにより、多くの関係者を適度な距離感で巻き込むことに成功していた。いきいき海鳥の会の参加者の多くは、認証制度の前に、学んだり、テーブル議論したりする機会があったのが、結果的に認証制度の理解を深め、共通認識の醸成に役立ったと答えており、上記の2つの認証のうち、豊岡市の事例に近い。

いきいき海鳥の会で作成した「4つの柱」(#1　生態系保全、#2　サプライチェーン構築、#3　環境人材育成、#4　消費行動変化)に合致しているかどうかを審査し、現在、2つが認証され、もう2つが認証申請中となっている。既に認証されている北るもい漁協では(I)の混獲防止という当初の認証対象であり、上築有機米生産組合では(II)のビオトープなどの町全体の環境保全に合致し、4つの柱の#1に注目して認証された。一方、認証申請中のものは、(III)で拡げられた地域活性などの視点から、#1を含まず#2や#4に注目して認証されようとしている。“環境保全と地域活性の両立”を目指した認証となりつつある。

現在、協議会では認証制度に関する直接的な議論や報告がされているが、SBF認証制度に対する共通認識を維持するための(いきいき海鳥の会のような)学びの場は失われている。今まで制度の丁寧な立ち上げが行われてきたが、今後、認証制度をどのように発展させるかについても、同様な議論の場が必要だろう(SBF認証制度の現状課題)。